

原爆文学研究会報

第二五号

原爆文学研究会 二〇〇八年一月

第二期核時代 「反核」の訴えを、核抑止論を補強するものと見なす言説がある。例えば、呉智英は「不条理な運命に抗して」『はだしのゲン』一九九八年八月、中央公論新社）所収）において「理屈抜きに原爆はいやだ、という観念的な平和主義や核アレルギーが実は核均衡理論を支えているのである」と述べている。核使用を抑止するためには「核兵器が通常兵器とは比較にならないほど恐ろしい兵器である」という認識を共有する必要があり、その恐ろしさを世に知らしめる「反核」の訴えは結果的に核抑止論を補強しているというのである。

そもそも呉は（現に五十年間の長きに亘って、人類は悲惨な大戦争を体験せずにすんだ）ことを理由に「核均衡理論はおおむね正しかったと思う」という立場を取っているのだが、このような議論をどのように評価するかというのは難しい問題である。呉が示す論理に対して、例えば、「反核」の訴えを核抑止論の補強物と見なすことは訴えた当人にとつては極めて不本意なことではないのか、あるいは、結局「五大国」による核保有独占を正当化するだけではないのか、といった反論を提示することができる。しかし、それらも「反核」の訴えが核抑止論に実効性を与えてきたという認識は本当に間違っているのか、あるいは核抑止論は核戦争を予防してきたのだから総合的に見れば利点の方が大きいという見方は本当に否定できるのか、とさらなる反駁を引き起こすだけだろう。

いずれにしても、これから「反核」と核抑止論をめぐる議論がますます複雑化していくことは必至である。坂元義和は「近代としての核時代」（『核対決と軍縮』（二〇〇四年一月、岩波書店）所収）において

「冷戦終結により、核時代は第二期に入った」と述べている。ポスト冷戦期においては、核保有の正当性の再定義化、新たな核拡散、核に代わるハイテク兵器の開発等によって、核をめぐる状況自体が流動化しつつある。「第二期核時代」において「反核」の訴えは、核抑止論は、そして原爆の表象と受容の仕方は、どのような変容を迫られるのか。問い続けていきたいと思う。（中野和典）

第二五回 原爆文学研究会報告

二〇〇八年九月一四日（土）九州大学六本松キャンパスで開催した第二五回原爆文学研究会には約二〇名が参加。

石川氏の発表については「吉永小百合を擁護する見解にも、もつと検討を加える必要があるのではないか」「被爆者像のステレオタイプ化に対する批判自体がステレオタイプ化しつつあるのではないか」等の質疑がありました。

ミニシンポジウムにおいては「なぜ、著者自身のライフストーリーを削除したのか」「日常性や大きな物語の「手触り」を楽しむたいという欲求を否定することは妥当なのか」等の質疑がありました。



◇ 研究発表¹

〈夢千代日記〉における原爆・白血 病・吉永小百合

石川 巧

早坂暁原作・脚本の「夢千代日記」は、NHKドラマ人間模様のひとつとして昭和五十六年二月十五日から三月十五日まで五回連続で放送された。夢千代こと永井左千子は、五年前に亡くなった母のあとを継いで、山陰の鄙びた温泉場で芸者置屋「はる家」を営んでいる。だが、夢千代には周囲の人間たちに知られたくない秘密があった。彼女は、広島に投下された原子爆弾で胎内被曝したことが原因と思われる白血病を患っており、半年ごとに通っている神戸の医者からも「あと三年」の命と宣告されていたのである。作品は、身体が病魔に蝕まれていく苦痛と恐怖に怯えながら、限られた時間を精一杯に生きようとする夢千代を中心に、それぞれが様々な事情をかかえている「はる家」の芸者衆やこの街に流れ着いた人間たちが引き起こす事件を描いている（その後、シリーズからなされ「続夢千代日記」、「新夢千代日記」が放映された）。

また、「夢千代日記」というタイトルからもわかるように、この作品では、彼女の日記が重要な役割を担っており、視聴者はその日記が綴られる場面での独白Ⅱナレーションを通して彼女の本心に触れることになる。いつも気丈にふるまう芸者・夢千が左千子というひとりの女に戻る瞬間が託されており、その偏差がもたらす哀切感、および、語りの二重性にドラマの見どころがあるといつてもいい。早坂暁は、自分自身の原爆体験と照らし合わせながら、人間の哀感

を届かなかった言葉Ⅱ空白のなかに閉じ込めるようなドラマを数多く創出してきた作家だが、この作品に限っていえば、第三者の言葉で被曝者の苦しみを説明するのではなく、被曝者が自らの〈顔〉と〈声〉で語ることに重点が置かれているのである。

〈夢千代日記〉シリーズを細かく見ていくと、闘病後に書かれた「新・夢千代日記」では、原爆というモチーフはもちろんのこと、人間の〈死〉そのものを思索的に表現しようとする意図が明確になっている。前二作では、あくまでも胎内被曝による白血病の発症という現在性の問題として原爆が語られているのに対し、「新・夢千代日記」では、夢千代に広島爆心地を歩かせ、そこに母が被曝した瞬間を「モノクロームの世界」として現出させたり、付添い看護婦として数多くの原爆症患者を看取ってきた母の友人・玉子を歴史の証言者として登場させたりして、過去の惨状に肉迫しようとする描き方がなされている。

こうした創作の背景をふまえて、本発表では、①ギミックとしての胎内被曝と白血病、②作品の舞台となる山陰Ⅱ「裏日本」をアジール（Ⅱ避難所）として捉えていく地政学的な視点、③シリーズのなかでの原爆の描き方とその深化、④作者・早坂における〈お遍路の思想〉、⑤吉永小百合という身体、以上の項目を設定して、作者・早坂暁がテレビドラマという媒体において、どのようにして新しい被曝者像を構築しようとしたかを考えた。

◇ミニシンポジウム報告

「畏」について学びつつ、「畏」について
て問い返した二十五分間

高野 吾朗

私の基調報告は二部構成のスタイルを取っていた。前半では、「この本から一体どのような研究姿勢を具体的に学ぶことができるか」という点に主眼を置いた。その上で、この本から幾つかの「主要キーワード」と思しきものを適宜抜き出すことにより、作品の全体像を手早く概観（および再確認）してみようとした。

私が「主要キーワード」として選んだのは、次の八つである……

①「分割線」「二項対立」②「想像力」③「被爆ナシヨナリズム」④「畏」「別の抑圧や忘却」⑤「横領」「死者の動員」。①②に関しては、次の引用がそれらの意味するところをほぼ言い尽くしている――

「自分たちの苦難の物語の裏側には、自分たちとのあいだで因果律を形成するもうひとつの物語が同時並行的に進行している」ことに思いをめぐらす想像力……（中略）こうした想像力を抜きに、国民国家の物語の枠を越えることは不可能だろうし、そこから派生して立ち上がる加害と被害という二項対立の言説の呪縛からも逃れることはできないであろう」。この引用中における「国民国家の物語の枠」の代表例が③である。原爆にまつわるあらゆる言説をこの枠へ陥れんとする④「畏」の実態、それによって新たに生まれかねない④「別の抑圧や忘却」や記憶の⑤「横領」といった事態、そして、生者の論理を通すためのみの勝手気ままな⑤「死者の動員」といった由々しき言説の数々……これらを次々と濃密に探求していく川口氏の腕

前は、傾聴に十分値する研究姿勢のように感じられてならなかった。

一方、報告後半では、この本における川口氏の自己言及部分を主に問題視しながら、(1)川口氏自身はなぜこれほどまでに「畏」や「横領」から自由であるかのごとく振舞えるのか(2)原爆に関する他人の言説に対しては一種の自虐性さえ要求しているが、この本自体は一体どれほど自虐的になれているというのか(3)原爆文学という領域生成における言説の序列化を批判的に考察したりしている本のようなが、この本自体が過去の原爆表象者たちの序列化をここまで暗黙のうちに行ってしまったていることに対しては、本当に無自覚なままでよいのか……といった点を、論題として試しに取り上げてみた。

◇ミニシンポジウム報告

「未来への付記」

ロベルタ ティベリ
Roberta Tiberi

前の二名の報告者とは異なり、私のように原爆文学研究の世界に入ったばかりの研究者にとつては、川口氏のテキストを適切かつ具体的に分析することは、残念ながら手に余るところがある。そのよくなわけで、私からの報告が、この分野に対する知識が足りない初心者の感想以上のものではないことを予めご了承いただきたい。

まず、『原爆文学という問題領域』を冒頭から再読して、「原爆文学」というジャンルの起源をもう少し考察する必要があると考えた。実際に、川口氏の指摘した歴史的な過程に同意するとしても、どのような基準で原爆文学／原爆児童文学は一つのジャンルと見なされ

るようになったのか、どのような基準で、ある作品は原爆文学／原爆児童文学と認められるのか、という問題についてもっと深く論じてほしかった。また、言及されていた「原爆もの」の本質や、原爆文学のジャンルとしての必要性などに関しても同様である。

川口氏の論は、被害者／加害者という言説の問題に大部分を当てている。被害者と加害者との関係性に関する反省は戦後の日本人の自己意識を再構築する作業の上で不可欠な過程ではあるが、被害者／加害者の位置・同一性を解決する論戦のうちに広島・長崎の投下された原爆の意味が薄れてしまうという危惧もある。誤解しやすい話題なので、広島・長崎で被爆した「日本」の被害者の存在と南京大虐殺やマニラ火刑などの「日本」の加害者の存在は一つにしてはいけない、ともう一度強調しておく必要があるだろう。植民地支配・虐殺という日本の加害は、広島・長崎に投下された原爆の被害の弁解にはならない。

『原爆文学という問題領域』^{プロブレマティク}には原爆文学の研究の未来に関して何度も問題が投げかけられている。私も体験者が失われつつある現在が、原爆文学の問題領域^{プロブレマティク}にとって重要で繊細な時期だと思う。イタリアでは、被害者／加害者、勝者／敗者という二項対立を軸として第二次世界大戦の記憶を再構築しようとする試みは増えている。そのような母国の状態について思索しながら、私は原爆文学に対しては事実を曲げない、明確で客観的な研究方法を試みたいと考えている。

彙報

第二五回 原爆文学研究会

○日時 二〇〇八年九月一四日(土) 一三時より

○会場 九州大学六本松キャンパス本館第一会議室

○研究発表

〈夢千代日記〉における原爆・白血病・吉永小百合

石川巧

《ミニ・シンポジウム》原爆文学研究への展望

——川口隆行『原爆文学という問題領域』^{プロブレマティク}を視座として

高野吾朗／長野秀樹／ロベルタ・ティベリ／川口隆行

編集後記

二五回目の研究会も発表者、報告者を始めご参会の皆様のご協力により無事開催することができました。準備段階では私の不手際のため複数の方にご迷惑をおかけしましたが、個人的に良い学びの機会になりました。現在は機関誌第七号の編集作業のまただ中。今回の研究会でのご発表・ご報告にもとづく批評も掲載いたしますので、ご期待下さい。第七号は次回研究会(二〇〇八年一月二〇日)の前には発行する予定です。(中野和典)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一一―六五二〇 福岡市中央区六本松四―二―一

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>